私の経営理念 経営方針

management philosophy & policy

〈おおつぼ・ゆたか〉
2003年6月入庫。常勤理事を経て、2004年6月より現職。座右の銘は「不易流行」。

佐賀信用金庫
理事長
大坪　豊

営業地域の概況

「佐賀」の名称の由来は、「日本武尊が御巡幸の時、楠樹の栄え繁る有様を見られ、この国は『栄の国』と呼ぶがよかろうと申され、その後『栄の都』といい、改めて佐嘉郡と呼ぶようになった」（意訳）と『肥前風土記』にある。明治維新に至り、佐嘉庁で新政の一環として達示をもって「嘉」が「賀」に改められて今日に至っている。

当金庫の営業地区は、佐賀県と福岡県大川市であるが、営業店がある佐賀市（十二店舗）、佐賀郡川副町（一店舗）および神埼市（一店舗）、鳥栖市（一店舗）を中心に十五店舗で、佐賀市を中心とした佐賀県の東部地区を営業地盤としている。

佐賀県内には、ほかに唐津信用金庫、伊万里信用金庫、杵島信用金庫と三金庫があるが、四金庫がそれぞれきれいに営業地盤を分け合っている珍しい地域である。

本店のある佐賀市は『葉隠』で知られた鍋島藩三十六万石の城下町で、平成十七年十月一日に佐賀市、諸富町、大和町、富士町および三瀬村が合併して、

シンボルマーク

マークの意味は、信頼・誠実・情熱をもって地域と共に21世紀へ向かって前進していく姿を表現しています。S字の末広がりは“さがしんきん”の頭文字と佐賀平野をアレンジしたもの。

営業地区

佐賀県：佐賀市、鳥栖市、多久市、唐津市、伊万里市、武雄市、鹿島市、小城市、嬉野市、神埼市、佐賀郡、神埼郡、三養基郡、杵島郡、藤津郡、東松浦郡、西松浦郡
福岡県：大川市

信頼・誠実・情熱をもって地域と共に！地域の繁栄に貢献し、地域に愛される金融機関への飽くなき挑戦！

人口二十万人の新しい佐賀市になり、来年には南部三町との合併に向け協議が継続されている。新しい佐賀市は、県庁所在地同士（佐賀市・福岡市）が接する全国でも珍しい市であり、背振山系の山麓部の山林や清流、古代肥前の国の行政府跡「肥前国庁」、中心部の長崎街道に代表される歴史遺産や佐賀城公園、日本の近代化を先導した「幕末維新期の佐賀」の魅力を紹介している佐賀城本丸歴史館、筑後川にかかる昇開橋や佐賀平野に広がるクリークや田園風景など、すばらしい環境に恵まれている。

毎年、佐賀市の嘉瀬川河川敷で熱気球の国際的な大会「佐賀インターナショナルバルーンフェスタ」が開催される。例年、百十数機のバルーンの参加と百万人の観客動員数を誇るが、今年は十一月一日から五日に開催され、当金庫もバルーン一機を所有し参加した。

佐賀市に隣接する神埼市と吉野ヶ里町にある「吉野ヶ里遺跡」は、わが国弥生時代最大規模の環濠集落であることが確認され、『魏志倭人伝』に記された邪馬台国の様子を彷彿とさせる建物跡などが発見されたことで、一躍全国の注目を集めた。「国営吉野ヶ里歴史公園」として整備され、日本の古代の歴史を解き明かすうえで、きわめて貴重な資料や情報が集まっている。

佐賀市には、伊勢皇大神宮の御分霊をいただく全国唯一の伊勢神社（九州のお伊勢さん）がある。また、市内の辻々には三百七十四体にも及ぶ恵比須像（えびすさん）があり、当金庫本店西隅にも恵比須像（ゆめこいえびす）がある。この「ゆめこいえびす」は最近、唐津市沖の宝当神社とならんで、宝くじのご利益があると話題を呼んでいる。

また、最近お笑いタレントの「はなわ」や島田洋七原作の『佐賀のがばいばあちゃん』が映画化、テレビドラマ化されるなど、全国的に佐賀の知名度がアップしてきた。

佐賀市の中心商店街はご多分にもれず、市民のライフスタイルの変化や市周縁部への相次ぐ大型ショッピングセンター進出で空洞化が進み、昔日の面影はない。今年十二月には三番目の大型ショッピングモールがオー

当金庫のバルーン「信金ドリーム号」

当金庫の概要

（平成18年３月末現在）

預金残高	1,020億円
貸出金残高	655億円
出資金	1.7億円
店舗数	15店舗
会員数	10,428人
役職員数	160人
預貸率	64.21％
自己資本比率	12.63％

十数年前当金庫本店近くの川の中から、小さな、小さなえびすさんが見つかった。その美しさに魅せられた商店街の人たちが、おおらかなえびすさんとして復元し、その名も「ゆめこいえびす」。街に夢と活気を取り戻しなくしたものが出てくるという縁起もののえびすさん。一佐賀はえびすさんの街である。

当金庫本店の一角に鎮座する“ゆめこいえびす”

プンする。全国有数ともいわれる整備された環状道路網沿いの専門店も、空洞化に拍車がかかると懸念される。

また、九州最大の都市・福岡市まではJRで最短三十分強、天神（福岡市の中心街）まで高速直通バスで一時間強と、近距離でしかも低料金で行けることから、〝ハレ〟の買い物は福岡へ、日用品は大型ショッピングセンターへという流れも商店街衰退の一因である。

一方、九州縦貫・横断両自動車道が東洋一のクローバー型ジャンクションで交差する鳥栖市は、九州の主要都市を車で最大二時間半足らずで結び、九州高速交通のクロスポイントとして交通利便性を確保している。また、JR鳥栖駅は鹿児島本線、長崎本線の分岐駅、また、久大本線の始発駅でもあり、鳥栖市は九州陸上交通の要衝として、数多くの企業・工場群が進出してきている。平成十六年三月には、九州最大規模のアウトレットモールが開業した。最近サッカーJ2の「サガン鳥栖」も注目を集めている。

当金庫の沿革および概況

当金庫は、戦後の混乱状態が収まらずインフレによる物価高、慢性的な資金不足で市中金融が常にひっ迫する中、貯蓄奨励と小口金融を目的として昭和二十三年三月に設立された佐賀投資株式会社を源とする。

その後、産業、経済再建の原動力となる中小零細事業所を法的に保護育成し、庶民金融の円滑化を図るための法的整備と、それに基づく金融機関の設立の機運が高まった。当時、佐賀県下には唐津、伊万里に信用組合があったが、佐賀市には存在しなかった。そのため、県当局、財務当局、市当局や地元経済界から佐賀市における信用組合の設立が強く望まれるようになった。

こうした中、当金庫の前身である佐賀信用組合は、佐賀投資株式会社を発展的に解消し、「佐賀の金は佐賀で使うこと、組合員同士が相互扶助の精神を以って郷土の繁栄に寄与することが、金融の真のあり方であるからであります」との発起提唱により、昭和二十四年十月十五日に市街地信用組合法に基づき、佐賀市元町（中心商店街）に設立された。その時点で佐賀投資株式会社から引き継いだ出資金百四十万七千円、預金九百七十九万二千円、貸出金九百五十四万七千円でスタートした。

二十八年二月に現在地に本店を移転し、信用金庫法により、同年三月二十八日佐賀信用金庫へ改組した。その後、佐賀市を中心に店舗網を充実し、前述のとおり十五店舗で営業している。当金庫初の支店として二十九年に開設した早津江支店（佐賀郡）が地元有志による請願で実現したことは、地域密着を標榜している当金庫として特筆すべきことである。

平成五年には、「信頼・誠実・情熱をもって地域と共に二十一世紀へ向かって前進していく姿を表現した」シンボルマークを制定した。同時にキャッチフレーズを「あなたの笑顔がほしいから」に決定し、職員のお客さまに接する気持ちと感謝の思いを表現している。

当金庫は、今年で創立五十七周年を迎えている。それは決して平坦な道ではなく、山あり、谷ありの道であったはずであったが、数多くの先人の努力と当金庫を盛り立てていただいたお客さま、関係各位のご指導、ご尽力によるものである。特に、設立当初から資金不足と不良債

権の回収に悪戦苦闘し、昭和三十年代半ばに金庫経営の礎を築いた先人の努力、苦労を忘れるわけにはいかない。

創業の心を大切にし、信用金庫の原点を常に探りながら、変化の荒波に耐え抜いていける足腰を強くして、自己改革、変革を恐れず、正面から向き合い、真に地域社会、住民の方々から必要とされる信用金庫をめざしている。

平成十七年三月期に念願の預金残高一千億円を突破した。翌十八年三月末現在の当金庫の主な計数は別掲のとおりである。

経営戦略および当面する諸課題

当金庫は、昭和二十四年創業以来、「地域社会の繁栄に貢献する」という理念のもと、お客さまから愛され親しまれる信用金庫になるよう歩んできた。この相互扶助の精神を念頭におき、協同組織金融機関としての社会的役割を全うすべく邁進してきたが、当金庫が長期的に発展していくためには、信用金庫の原点に立ち返り、会員の方々からの支持を得、信頼関係を確立して地域社会との共存共栄を図る必要があると考える。

昨年度の金融界を振り返ると、金融システムの動揺をもたらした不良債権処理問題がようやく峠を越え、金融システムが安定化へ向かい始めた中で、四月にはペイオフの凍結が完全解除されるなど、日本の金融が非常時を脱出し、平時へ移行しつつあることを印象づけた一年であった。

経済状況は全体としては回復傾向を続け、明るい兆しが見えつつある。佐賀でも損保ジャパンのコールセンターや小糸製作所の工場の進出による雇用創出が期待されるなどの明るい話題もみられる一方、中心商店街の空洞化は深刻さを増し、建設業においても公共工事の圧縮で多くの業者が淘汰されるなど、地元中小企業者にとって依然として厳しい状況に変わりはない。

こうした中、当金庫では、地元中小零細企業の経営改善・再生には佐賀県中小企業再生支援協議会との連携で一定の成果を上げている。リレーションシップバンキングの取り組みとして、私募債の引き受けを九州北部信用金庫協会管内では初めて実現し、動産担保など新しい金融手法へのチャレンジを通して地域金融の円滑化に貢献するよう努力している。

今年度の金融業界においては、郵政民営化、政府系金融機関の統廃合・民営化、預り資産ビジネスの拡大、新銀行代理店制度のスタートを見据えた対応が求められる。このため当金庫においても、従来型の営業スタイルをコスト、収益を意識した新渉外体制に転換し、これに窓口営業力の強化を加えた内・外一体となった推進体制の構築を図り、全員営業体制をさらに推し進めている。

今年度は、「しんきんルネッサンス二〇〇六」に基づき、地域社会、顧客により一層目を向け、これに金庫を加えた「三方よしの経営実践」を経営方針の一つとして打ち出した。前年度に過去長年の諸問題に一応のめどがついたため、これから新たなスタートを切って「守りから攻めへ」の転換を図り、地域金融機関相互の激しい競争に挑戦していかなければならない。そのためには、職員一人ひとりが自己啓発に努め、レベルアップを図って地域社会・顧客にとって「よき相談相手」となることが不可欠である。また、そうなることがお客さまに選ばれる金融機関への途（みち）につながっていく。

地域から当金庫に課せられた期待に十分応えていくには、収益意識を育み高め、貸出金増強を中心に安定的な収益の確保を図ることが不可欠であることから、経営方針には「経営基盤の拡充」（副題：お客さまに選ばれる金融機関への挑戦）を据えた。同時に、公共性の高い金融機関には高いコンプライアンスが求められており、経営方針の

一つとして「コンプライアンス重視の経営」姿勢を強く打ち出したところである。

その結果として「地域社会よし」「お客さまよし」「金庫よし」となるよう取り組み、共に幸せになれるよう役職員一丸となって邁進しなければならない。

経営基盤の拡充

一　持続可能な安定的収益の確保

・良質な貸出資産の積み上げ
・貸出資産内容の健全化
・地域シェアの拡大

二　コンプライアンス重視の経営

・法令遵守体制の強化
・基本動作の徹底

三　三方よしの好循環経営の実践

・顧客満足度の向上
・地域社会づくりへの参画
・働きがいのある職場づくり

地域貢献活動

1　地域行事への参加

①「栄の国まつり」の総踊りへの参加

毎年八月、第一日曜日午後六時より佐賀市中央大通りで開催される総踊りには百名以上で参加。昨年度は女性用の浴衣を新調した。

②鳥栖山笠

毎年七月末の土・日曜日に開催される鳥栖夏祭りに、鳥栖支店ほかの職員で山笠の運行に協力し、地域の皆さんから感謝されている。

③富士町健康マラソン大会

毎年四月に開催され、古湯温泉支店が運営に協力している。

2　ボランティア活動

①店周清掃活動

全店で毎朝店周の清掃を行っている。十七年には本店地区においての活動が評価され、佐賀市長より表彰を受けた。

②ファミリー祭

毎年十一月に開催している。地域の皆さんへの感謝を込めて子どもから大人まで楽しめるイベントやバザー、模擬店を開催し、売上金は佐賀善意銀行へ預託している。

③献血運動

毎年六月に「信用金庫の日」を記念して職員、地域の方で行っている。毎年百名以上の協力がある。

3　顧客サークル活動

①運営

年金友の会の活動であり、観劇会と旅行を隔年で開催している。観劇会は佐賀市文化会館を貸切り、千五百名以上の参加がある。また、旅行についてはこれまで営業店単位で行ってきたものを今年から全店合同の旅行として開催し、総勢三百名の参加を得た。

②釣友会運営

釣りを趣味とされるお客さまのサークルで、年四回の釣り大会を開催している。

③企業会計セミナー

「中小企業基盤整備機構」との共催で十七年度より開始した。企業会計について税理士から講義を受け、終了後懇親会を開催している。会計法、税法などの毎年の改正点も併せて勉強している。

「栄の国まつり」へ参加！（上）。店周の清掃活動や花壇の整備などに取り組む（下）。

おわりに

農漁業とサービス業が中心の佐賀市周辺でも、景気の底打ち感が出てきたように思われる。企業倒産件数や有効求人倍率をみても、都市部の好況がようやく地方にも染み出してきた感触を得ている。こうした経済状況を反映して、十八年三月末の貸出金は前年同期比二・四％増の六百五十五億四千九百万円と、七年ぶりに増加に転じた。体力面では、不良債権処理負担が軽減したのが大きい。

不良債権額は前期比二〇・六％減の七十二億七千八百万円、不良債権比率も三・〇一ポイント改善して一〇・六八％となった。さらに不良債権比率の改善を進めていく必要があるが、中小零細事業所が多い佐賀県の産業構造を考慮すると、この数値を許容して地域経済を支えていかなければならない。

ここ数年の最大課題だった不良債権処理が経営の正面からはずれつつあり、新しい資金ニーズを探る段階と判断している。メガバンクや地銀に比べれば周回遅れの感は否めないが、当金庫も新しいフェーズに入ったのは確かである。

ただし、かつてのバブル期のような手法の営業をするべきではない。地域密着という核の部分を固めながら、新しい収益源を手探りするという堅実さが求められる。心情的にはコア業務をどう維持できるかが地域からの信頼維持につながり、当金庫の生き残りを決めると思う。顔が見える営業を通じて得意先を幅広く求め、地盤である佐賀市内でシェア一〇％を少しでも高めていかなければならない。

昨年十月から全十五店舗に新規開拓専担を一人ずつ配置した。各店舗には平均三人の営業担当を置いているが、このうち一人を取引先の新規開拓や疎遠になっている先の再顧客化に専念させている。スタート当初は新体制へのとまどいもみられたが、今年に入りようやく狙いが浸透しつつある。地域密着という原点に戻り、個々の営業力を磨いていくという地道なスタイルに固執していきたい。

十五年三月期に大口融資先の倒産により、赤字決算を余儀なくされた教訓を糧に、信用金庫本来の使命である中小零細企業者への小口融資の推進、信用金庫ならではの親身な相談機能の充実を図らなければならない。取引先の途上管理には、特に工夫を凝らしている。

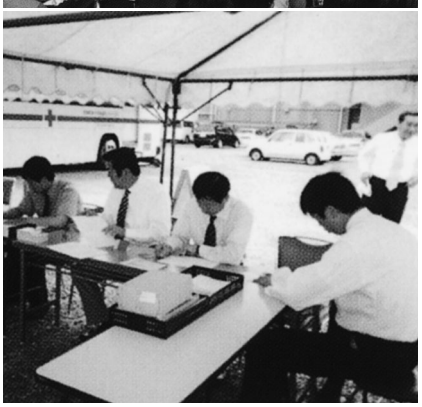
コア業務以外では、当面国債と変額保険の販売にとどめているが、投資信託の販売は時期をみて判断したい。

一方で、市町村合併など変わりいく地域に合わせた店舗網の再編成も課題である。

職員のライフスタイルの変化、二〇〇七年問題などへ対応するための人事制度改革を通して、生き生きとした職場環境を作っていかなければならない。

最近、金融機関でコンプライアンス問題が散見される。対岸の火事とはせず、他山の石としてコンプライアンス態勢強化に腐心していきたい。

他の金融機関には遅々とした歩みの印象を与えようが、身の丈に合った、そして少しだけ背伸びした金庫経営をやっていきたい。



「さがしんきん秋のファミリー祭」（上）。チャリティーバザー等の売上金は佐賀善意銀行に預託した（下）。